

熊本学園大学 外国語学部 第01号

英米学科 GAZETTE

平成28年7月
発行・編集
熊本学園大学 外国語学部

巻頭言

外国語学部英米学科長教授 神本 忠光

オバマ米大統領が、伊勢志摩サミット後に被爆地広島を訪問した。その際出迎えてくれた小中学生へ自作の折り鶴を手渡した。緻密に計算されたパフォーマンスだが、「自分で折った」というその行為に心を打たれた人は少なくないだろう。

折り鶴の原点は、「原爆の子の像」のモデルである佐々木禎子さんである。快復を願って千羽以上を折ったと伝えられている。彼女が折った鶴は、アメリカ中西部ミズーリ州のトルーマン図書館にも寄贈されている。トルーマンと言えば、原爆投下を決断した第33代大統領である。さらには、オバマ大統領の故郷であるハワイ州の真珠湾の施設にも常設展示されている。キャラメルのパッケージで折られているという。どちらも、トルーマン大統領の孫であるダニエルさんと、禎子さんの兄雅弘さん家族の地道な活動の成果である。

安倍首相に今年12月7日（現地時間）に真珠湾で献花を促す声が米国内で浮上している。「ついで」ではないこの提案に、安倍首相はどう応じるだろうか。"The ball is in our

court." という状態である。

外国語部英米学科は、22年前の1994年（平成6年）に誕生した。総勢18名の教員からなる。対象とする学習者は異なるが、英語教育に携わる者同士の理解を深める意図で、この「熊本学園大学英米学科 GAZETTE (新聞)」を創刊する。今年度は4回の発行を目指している。



英米学科の最新ニュース

今年も7月から約一ヶ月、英米学科の学生17名が米国ミネソタ州のベセル大学に語学研修にでかける。ホームステイを通して幅広い英語に触れ、大きく成長する期間である。

研究紹介

Language Learning Motivation というもの

外国語学部英米学科教授 林 日出男

外国語習得の動機づけ問題が、長年の私の研究主分野です。学術的にこの分野の研究は、「外国語習得での動機づけとは何か」という基本的な問いを中心に進められていきました。それに答えるべく、外国語習得動機づけを構成する重要要因として integrativeness, instrumentality, intrinsic motivation, extrinsic motivation, goal orientations, anxiety, willingness to communicate, international posture, Ideal L2 Self, complex dynamic systems, directed motivational currents など、数多くの概念が提案され、検証され、確認されてきました。これらは、語学独特の研究から生まれたもの、心理学の世界から持ち込まれたもの、あるいは単なる思い付きにも取れるものなど、多様であり、複雑であり、また重複も見られ、不可解です。そのために、これら全体を整理することはほとんど不可能であるように見えます。

実は上記の多くは、広く社会で外国語を使うことを目標とする種類の motivation 要因 (integrativeness, international posture, willingness to communicate, Ideal L2 Self など) と、より狭い教室現場での科目としての「英語」への motivation 要因 (intrinsic motivation, extrinsic motivation, goal orientations など) とに大きく分けることができます。近年、Robert

Gardner(2010) は前者を language learning motivation、後者を language classroom motivation と呼び、区別しています。例えば、「将来、海外で活躍したい」「国際人になりたい」と夢を語りながらも、目の前の英語学習へ一向に意欲のわかない高校生や大学生は、前者が高い一方で後者が低迷している例です。逆に、受験科目として、教科として英語を捉え、その目的で邁進してきたが、それが現実の言語であり社会で使われるものという意識が低いばかりに、ある時から虚しさに取りつかれ英語から離れる大学生や社会人などは、その逆の例です。いずれの例も、現実に英語が日常生活で使われていない EFL 国日本では、起こりがちな結末です (Hayashi, 2013)。外国語への憧れが憧れで終るのも、受験英語が空回りするのも、この国の宿命かも知れません。

参考文献

Gardner, R. (2010). *Motivation and second language acquisition: The socio-educational model*. New York: Peter Lang.

Hayashi, H. (2013). Dual goal orientation in the Japanese context: A case study of two EFL learners. In M. T. Apple, D. Da Silva, & T. Fellner (Eds.), *Language learning motivation in Japan* (pp. 75-92). Bristol: Multilingual Matters.

学者への道程

英語学文体論研究への道

外国語学部英米学科教授 堀 正広

私が教師になることを心に決めたのは、高専の電気工学科を卒業したときでした。高専の5年間では電気工学の勉強をしましたが、最も没頭したのは読書でした。ユニークな国語の先生の影響もあって、読書は日本文学からロシア文学、そしてイギリス文学とさまざまな文学書を濫読しました。大学の文学部に入学した後は、アメリカ文学に傾倒し、Ernest Hemingway, Mark Twain, Emily Dickinson, Walt Whitman などを読み、1年生の時には *Catcher in the Rye* で有名な J. D. Salinger を卒業論文のテーマにすることに決め、Salinger のほとんどの作品を読みました。しかし、2年生の時に文学にも精通し、英語学を専門として、作家の文体研究をされていた、ある先生の授業に衝撃を受けました。授業では、英米文学作品の英語を言語学的に分析して、登場人物や作家の物の考え方などを明らかにするものでした。ことばを

分析することのおもしろさに取り憑かれてしまいました。その先生は、その後私の生涯の師となりました。

恩師のアドバイスもあり、卒業論文も修士論文も19世紀を代表する英国の小説家 Charles Dickens の言語文体を研究しました。修士課程修了後、恩師とお会いするたびに、いつ博士論文は書き上げるのだと叱咤されました。50歳を前に、英国の出版社 Palgrave Macmillan から *Investigating Dickens' Style* という本を出版し、博士論文として受理されました。幸いにもこの著書は英語コーパス学会の学会賞を受賞しました。このことを一番喜んでいただいたのは恩師の先生でした。それまで20数年間先生にほめられることはほとんどありませんでしたが、その後の出版物に関しては、出版する度にお褒めのことばをいただきました。日本人であっても、英語で論文を書いて世界に発信しなければいけない。日本人の読みの英語学を世界に知らしめなければならない。そう言われ続けてきました。そのことをいつも咀嚼玩味しながら今も英語文体研究に励んでいます。

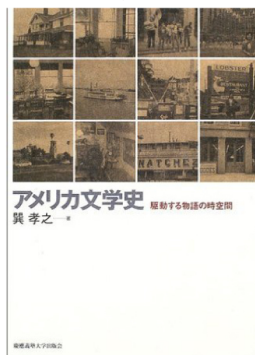
図書紹介

巽 孝之著 『アメリカ文学史——駆動する物語の時空間』 (2003) 慶應義塾大学出版会

外国語学部英米学科教授 向井久美子

私の専門はアメリカ文学で、十年以上「米文学史」を担当しています。本書は、現在日本アメリカ文学学会会長の巽先生が、学部や大学院で「アメリカ文学史」をご担当された経験に基づいて書かれたものですが、内容は決して学生向けだけのレベルではありません。特に、「ロードムービー」ならぬ「ロード・ナラティブ」(まだ旅の途上にあるアメリカ文学)として読み直すという新しい視点は、従来の文学史には見られない斬新さがあります。一方、これまでの未開の大自然や大海原を扱ったダイナミズムを感じる、これぞアメリカといったフロンティア・スピリットも軽視されてはいません。対ヨーロッパ的に常に移動し続けるアメリカという国の特徴が詳説され、大部分がなるほどと納得できるものだと思います。

す。全てが「ロード・ナラティブ」の切り口で述べられている訳ではありませんが、これほど映画化された作品とその解説が網羅されている本も珍しく、授業で映画を使用する際にも非常に有用です。また、「ロード・ナラティブ」の代表とも言える『ハック・フィン』を「リンチ国家アメリカ」を描いた作品、と切り切る潔さも心地よく、アメリカ文学の諸相を知る上で、お薦めの一冊です。



学会・調査報告

外国語学部英米学科専任講師
Christie Provenzano

At Thai TESOL's 36th International Conference in Khon Kaen, Thailand on January 29 and 30, 2016, I reported on an action research project in my second year writing class. I investigated how my students felt about their weekly fluency activity: a diary writing assignment. I asked them their opinion about the assignment in general, and also if they preferred to carry it out on paper or digitally, on a weblog. Most students found the diary assignment challeng-

ing but important, and they preferred the weblog version. Those who preferred paper reported a lack of confidence in using computers and/or poor typing skills. These results allowed me to adjust the assignment and to offer more support to students with limited computer skills. This presentation was well attended by TESOL practitioners based all over Asia. The lively Q&A period provided a chance for people to ask questions about my project and to share their own experiences.

編集後記

熊本地震は当たり前だと思っていた日常を一変させた。大学も例外ではなく、建物が甚大な被害を受け、教務課は教室算段に腐心した。一方、学生課は学生の安否確認に奔走した。研究室も本が散乱し、足の踏み場もなかった。徐々に復旧はしているが、牛歩のごとき様である。図書館も、今だに奮闘中である。季節の移り変わりで新たな問題続出だが、学生は日常を取り戻そうと、日々勉学に励んでいる。熊本、がんばれ！がんばるばい、熊本！（TK）

編集人 神本 忠光（英米学科長）

〒862-8680

熊本市中央区大江 2-5-1

TEL: 096-364-5161（代表）

Mail: kamimoto@kumagaku.ac.jp

